

# ハルトとパパの 夢のゴール



## この本について

---

Nine-year-old Haruto dreams of scoring the winning goal at the World Cup — just like the heroes he watches with his father every night. When his dad surprises him with tickets to see a live World Cup match in Tokyo, the two embark on an unforgettable day through the city, and Haruto discovers that his greatest inspiration has been beside him all along.



ハルト



パパ



# ワールドカップの朝

## ## ワールドカップの朝

---

ワールドカップが始まる朝、ハルトは目ざましより早く目をさました。カーテンのすきまから入る光が、ベッドの横のサッカーボールを丸く照らしている。昨日の夜にみがいたそのボールは、今日はいつもよりぴかっと見えた。東京の朝の音まで少し浮き立って聞こえて、ハルトは布団をはねのけて立ち上がった。

リビングではテレビがもうついていて、開幕を知らせるニュースが流れていた。大きな旗、歌うサポーター、遠くから集まる選手たち。ハルトは画面にぐっと近づき、いつか自分もあの芝生の上で、試合を決める最後のゴールを決めたいと強く思う。胸の奥で、夢が朝日みたいにじわっと広がった。

毎晩パパと試合を見るのが、ハルトのいちばん好きな時間だった。すばやいパスが通るたび、二人で同じように息をのみ、すごいシュートが決まるたび、ほとんど同時に立ち上がる。パパの『今の見たか』という声を聞くと、サッカーはテレビの中だけのものではなく、自分の明日へつながるものを感じられた。

キッチンからトーストの香りがして、ママがココアを運んできた。その向こうでパパは、なぜか朝からにやにやしている。ハルトが『どうしたの』と聞くと、パパは『今日はいいい日になるぞ』とだけ言って肩をすくめた。ひみつをかくしたその笑顔は、まだ鳴っていないキックオフの笛みたいに、ハルトの心を早くした。



FIFA WORLD CUP  
ワールドカップ開幕!



# テーブルの封筒

## ## テーブルの封筒

---

朝ごはんのあと、テーブルのはしに小さなクリーム色の封筒が置いてあるのを、ハルトは見つけた。赤と青の模様が入っていて、真ん中にはサッカーボールによく似たマークがある。見るからにふつうの手紙ではない。ハルトの目は、磁石みたいにその封筒へ引っぱられた。

『さわっていい?』と聞くと、パパはわざとゆっくりコーヒーを飲んでから、『まだだめ』と笑った。ハルトは口をとがらせたけれど、心の中ではもう何十通りも中身を想像していた。ポスターかもしれないし、新しい練習ノートかもしれない。けれど、いちばん大きな予想は、こわくて声に出せなかった。

その日は公園でボールをける約束をしていたのに、ハルトの頭の中は封筒のことでいっぱいだった。リフティングをしても、数えるたびに『もしも』『まさか』が混ざる。パパはそんなハルトを見て、『今日は足より顔のほうが忙しいな』と言い、二人で笑った。笑っても、胸のどきどきはまるで止まらない。

昼が近づくほど、時計の針はいたずらみたいに遅く動いた。ママまで『パパのひみつ、わたしも今朝からにやけちゃう』と言うので、ハルトはますます気になってしまう。いつもなら長く感じない午前中が、この日だけは延長戦のように長くて、ハルトは何度も窓の外空を見上げた。





# パパのサプライズ

## ## パパのサプライズ

---

そして昼すぎ、ついにパパが封筒を両手で持ってハルトの前に座った。『よし、オープン』という声は、宝箱を開ける合図みたいだった。ハルトは息を止めて封を切る。指先が少しふるえて、紙のこすれる音さえ大きく聞こえた。

中から出てきたのは、きらっとした二枚のチケットだった。会場の名前、今日の日付、ワールドカップの文字。ほんものだ、と気づいた瞬間、ハルトの目はまんまるになる。『えっ、えっ、行けるの？ ぼく、本当に行けるの？』とたずねる声が、自分でも信じられないくらい高くなった。

パパはうなずいて、『今夜、二人で見に行こう』と言った。ハルトはうれしさがあふれて、その場でぴよんと飛び上がる。ママはクローゼットから青いマフラーを取り出し、『寒くなっても大丈夫。応援にもぴったりでしょう』と首に巻いてくれた。家の中なのに、もうスタジアムの風が吹きはじめた気がした。

ハルトは何度もチケットを見直した。紙なのに、まるで夢そのものを持っているみたいに重く、大事に感じる。毎晩テレビで見っていた世界へ、今日はパパと一緒に入っていくのだ。『ありがとう、パパ』と言うと、パパは少し照れた顔で、『まだ早いぞ。今日はここからが本番だ』と笑った。



WORLD CUP

Official match ticket for the 2010 FIFA World Cup

Match:  vs

Stadium:

Category:

Seat:

Price:

Valid for:

Barcode area

WORLD CUP

Official match ticket for the 2010 FIFA World Cup

Match:  vs

Stadium:

Category:

Seat:

Price:

Valid for:

Barcode area



# 出発のしたく

## ## 出発のしたく

---

出かける前、ハルトは鏡の前で何度もマフラーを結びなおした。お気に入りのスニーカーをはき、飲み物の入った小さなリュックを背負うと、自分が少しだけ代表選手になったような気分になる。パパも動きやすい上着を着ていて、いつもより若く見えた。二人とも、遠足の朝みたいな顔をしていた。

玄関でママがスマホを持ち、『ちょっと止まって』と笑う。並んで立つと、ハルトは自然に胸を張った。写真を撮り終わると、ママは『思いきり楽しんでおいで。でも人が多いから、ちゃんと手をつなぐのよ』とやさしく言う。ハルトは元気よくうなずき、パパは『監督の指示は守ります』と敬礼して、三人で吹き出した。

外に出ると、東京の街はもうお祭りみたいだった。店先には各国の旗がゆれ、通りを歩く人たちの服も、赤、青、白、黄色とにぎやかだ。サッカーボール柄の風船を持つ子や、歌を口ずさむ人もいる。ハルトは目に入るもの全部が新しく見えて、首が左右に忙しく動いた。

駅へ向かう道で、パパは歩幅を少しゆっくりにしてくれた。ハルトはチケットの入った封筒を何度もポケットの上から確かめる。なくしていないと分かっても、またさわりたくなるほど大事だった。改札の向こうには、もっと大きなわくわくが待っている。そう思うと、心が先に走り出して、足まで自然に速くなった。





# 電車の窓にうつる顔

## ## 電車の窓にうつる顔

ホームに電車が入ってくると、車内はすでに応援へ向かう人でいっぱいだった。ハルトとパパは人の流れに合わせて乗りこみ、つり革の下の小さなすきまに並んで立つ。電車が動き出すと、いろいろな言葉の会話や笑い声がゆれに混ざり、まるで一台まるごとスタジアムへ走る大きな応援バスみたいだった。

向かいの席にはほおに小さな国旗のシールを貼った子が座り、そのとなりでは年配の夫婦が同じ色の帽子をかぶっていた。知らない人どうしなのに、目が合うとにこっと笑う。サッカーがあるだけで、こんなふうには人は仲よくなれるのだと知って、ハルトは少し不思議で、でもとてもいい気持ちになった。

『パパは今日、どんなプレーが見たい？』と聞くと、パパは『走りきるプレーかな』と答えた。カッコいいシュートより、最後まであきらめず追いかける足に心を動かされるのだという。ハルトは好きな選手の名前を次々あげ、あのフェイント、このミドルシュートと身ぶりつきで語り、パパはうれしそうに聞いていた。

けれど、窓にうつるパパの横顔が、ふと静かになる瞬間があった。にぎやかな車内なのに、その顔だけは遠い昔を見ているみたいだ。ハルトが首をかしげると、パパは気づいて笑い、『もうすぐ着くな』とだけ言った。その笑顔の裏に、まだ聞いていない何かがあると、ハルトはなんとなく感じた。





# パパのひみつの夢


## パパのひみつの夢

電車が大きくカーブしたとき、ハルトは思いきってたずねた。『パパ、さっき何を考えてたの？』パパは少し驚いたようにまばたきをして、それからつり革を持つ手に力を入れた。いつもの軽い返事ではなく、言葉をえらぶような間があって、ハルトも自然と背すじをのばした。

『実はね、パパも子どものころ、サッカー選手になりたかったんだ』その一言を聞いた瞬間、電車の音が急に遠くなった気がした。ハルトは目を丸くする。毎晩となりで試合を見て、いっしょに公園でボールをけてくれるパパが、そんな夢を持っていたなんて、どうして今まで一度も知らなかったのだろう。

パパは少し笑いながら、朝から暗くなるまでボールを追いかけていた話をしてくれた。うまくいかない日もたくさんあって、別の道を選んだけれど、サッカーを好きな気持ちだけは消えなかったのだという。『夢ってね、なくなるというより、形を変えて胸の中に残ることがあるんだ』と、パパは窓の外を見ながら言った。

ハルトはその言葉を、こぼさないように心の中で受け止めた。いつもやさしいパパが、昔は自分みたいにボールを追いかける少年だったと想像すると、急にパパがもっと近く感じられる。『ぼく、もっと練習する。あきらめたくない』とつぶやくと、パパはうなずき、『うん。夢は、続ける人の足もとで育つからな』と、まっすぐな声で答えた。



実は昔は  
サッカー選手を  
目指してたんだ



# 人の波のむこう

## 人の波のむこう

駅に着くと、ホームから改札まで人の波が続いていた。上へ向かう階段の先から、もう太鼓の音と歌声が聞こえてくる。ハルトは『わあ…』と小さく声をもらした。テレビ越しでは広く見えていた世界が、今日は自分の足の下でほんとうに動いている。胸のどきどきが、歩くたびに大きくなる。

パパは『はぐれないように』と言って、ハルトの手をしっかりとぎった。その手は大きくてあたたかく、押し合う人の流れの中でも不思議と安心できた。ハルトは少しだけ照れたけれど、すぐにそのままにした。こんなに人が多い場所で、パパの手はただの手ではなく、まるでゴールへ向かうための確かな道しるべだった。

スタジアムへ続く道には、屋台やグッズ売り場が並び、焼きたてのソーセージのにおいが風に乗っていた。顔にペイントをした人たちが歌い、旗がばさばさと鳴る。ハルトは目も耳もいそがしくて、ひとつ感動するたびに次の感動がやってくる。パパは『まだ中はもっとすごいぞ』と笑い、その言葉だけでまた胸が跳ねた。

会場の大きな外壁が見えたとき、ハルトは思わず立ち止まった。空に届きそうなほど高く、入口にはたくさんの灯りが並んでいる。ここに世界中の夢が集まるのかと思うと、自分の小さな夢も一緒に運びこめそうな気がした。パパと顔を見合わせると、二人とも同じように笑っていて、そのことがとてもうれしかった。





# スタジアムの光

## ## スタジアムの光

---

ゲートでチケットを見せ、中へ入った瞬間、ひんやりした空気と大きなざわめきが体を包んだ。階段を上り、観客席の出口をぬけたその先で、ハルトは息をのんだ。目の前には、絵本より鮮やかな緑のピッチがひろがっていた。ライトに照らされた芝は宝石みたいで、白いラインは夜空にひくまっすぐな願いの線のようにだった。

席は少し高い場所だったが、そのぶんスタジアム全部が見わたせた。ぐるりと囲む観客席は色の波で、誰かが立てば別の場所で旗が揺れ、声が返っていく。ハルトは座るのももったいなくて、しばらく手すりにつかまったまま下を見つめた。テレビの中では小さく見えた選手たちの動きが、ここでは呼吸まで伝わってきそうだった。

選手たちがウォーミングアップに出てくると、場内の音が一段大きくなる。ボールをける乾いた音、スパイクが芝をこする音、アナウンスの声。国歌が流れると、ふざけていた観客までぴたりと静かになり、そのあと一気に拍手が広がった。ハルトはその変化に鳥肌が立ち、自分もこの夜の一部になれた気がした。

パパは身をのり出すハルトの肩に手を置き、『ボールだけじゃなくて、ボールをもらう前の動きも見ると面白いぞ』と教えてくれた。そんな見方を聞くと、試合がもっと深い秘密を持つものに思えてくる。ハルトはうなずきながら、パパの横顔をちらりと見た。そこには大人の顔と、少年みたいに目を輝かせる顔の両方があった。





# キックオフの音

## ## キックオフの音

---

やがて主審の笛が鳴り、試合が始まった。たった一つの音なのに、スタジアムじゅうの空気がぱんとはじけたみたいだった。最初のパスが出た瞬間、観客席から低いうなりのような声上がる。ハルトはまばたきするのも惜しくて、前のめりのままピッチを追いかけた。夢の世界が、とうとう走り出したのだ。

ボールは思っていたよりずっと速く、選手たちはその何倍も速く動いていた。ぶつかりそうでぶつからず、ほんの一步で流れが変わる。『今のターン！』『そこだ！』とあちこちから声が飛び、会場は大きな心臓みたいにどくどく鳴っている。ハルトも知らないうちに立ち上がり、両手をぎゅっとにぎっていた。

テレビではかっこよく見えるプレーも、目の前で見ると苦しさとかんばりがいっしょに見えた。転んでもすぐ起きる足、ボールを失っても追いかける背中、味方のために走る選手の顔。ハルトは、ゴールのすごさだけでなく、その前に積み重なる小さな努力の重さを、はじめて体でわかった気がした。

いい場面になるたび、ハルトとパパはほとんど同時に息をのんだり、声を上げたりした。となり同士で見ているだけなのに、気持ちが一つの応援旗みたいにぴたりとそろろう。ハルトは『パパと来られてよかった』と心の中で思う。こんな夜は、一人で見てもきっと同じ色にはならなかった。





# 前半のねばり

## ## 前半のねばり

前半が進むにつれ、試合はますます熱くなった。強いシュートがバーに当たって高くはね返り、会場じゅうから『ああーっ』と同じ声上がる。つぎの瞬間には反対側が一気に攻めこみ、今度は守るチームのサポーターが立ち上がる。どちらに転ぶかわからないからこそ、時間の一分一分が金色に光って見えた。

とくにすごかったのは、ゴールキーパーのセーブだった。体を投げ出して指先だけでボールをはじくたび、まるで空を飛んでいるみたいに見える。ハルトは思わず『すごい…』とつぶやいた。ヒーローは点を取る人だけではない。みんなの願いを背中で受け止める人も、同じくらいカッコいいのだと知った。

パパは興奮しながらも、『こういう試合は、あせらないチームが強いんだ』と教えてくれた。一人が目立つだけでは勝てないこと、仲間の位置を信じて走ること、声をかけ合うこと。ハルトはうなずきながら、自分が公園で一人でドリブルばかりしていた日を思い出す。夢に近づくには、広い目も必要なのだと気づいた。

やがて前半終了の笛が鳴り、スタジアムは大きく息をついたようなざわめきに包まれた。ハルトは座席に腰を下ろしたとたん、自分がずっと肩に力を入れていたことに気づく。まだ点は入っていない。でも、不思議とがっかりはしていなかった。続きがあること自体が、たまらなくうれしかった。





# ハーフタイムの話

## ## ハーフタイムの話

ハーフタイムになると、通路にはまたにぎやかな人の流れができた。パパは温かいココアと大きなホットドッグを買ってきてくれ、二人で半分こした。パンをかじると、外の寒さと試合の熱でからっぽになっていたおなかに、じんわり力が戻ってくる。ハルトはほおをふくらませたまま、『後半、絶対すごくなるね』と言った。

パパはココアのふたから立つ湯気を見ながら、静かに笑った。『パパは選手にはなれなかったけどね、サッカーを好きでいてよかったと思ってる』と言う。もし好きでいなかったら、毎晩ハルトと試合を見て、同じ場面で叫んで、今日ここに並んで座ることもなかったかもしれない。そう聞いて、ハルトの胸はあたたかくなった。

『夢がかなわなかったら、かなしい？』ハルトがそっと聞くと、パパは少し考えてから答えた。『かなしい日もある。でも、そこで終わりじゃない。夢に向かってがんばった時間は、その人の力になるし、だれかの夢を支える力にもなる』その言葉は、ホイッスルよりもまっすぐにハルトの心へ届いた。

ハルトはチケットの半券を指でなぞりながら、いま隣にいる人こそ、自分のいちばん近くの先生なのかもしれないと思った。ボールのけり方だけではなく、あきらめない気持ちの持ち方まで教えてくれる人。『パパ、ぼく、もっと本気でうまくなりたい』と言うと、パパは『知ってるよ』と答え、その一言が何より頼もしかった。





# 後半の祈り

## ## 後半の祈り

後半が始まると、試合の速さはさらに上がった。選手たちの足音こそ聞こえないのに、ピッチの上では見えない火花が散っているようだ。パスがつながるたび、観客席の波が前へ押し出される。ハルトは両ひざの上に手を置いて身をのり出し、ボールの行方といっしょに心まで走らせていた。

一度、決まりそうな場面があった。ゴール前で味方のパスが通り、スタジアムじゅうが『入る！』と立ち上がる。けれどシュートはほんの少しだけそれで、ネットの横を抜けてしまった。ハルトの口からも大きなため息がもれたが、パパはすぐに『次がある。次の一本のために走るんだ』と力強く言った。

その言葉を聞いたとき、ハルトは自分の練習のことを思い出した。失敗するとすぐに悔しくなって、ボールを強くけってしまう日がある。でも目の前の選手たちは、はずしても下を向かず、すぐ次の場所へ走っていた。ハルトは胸の中で決める。ぼくも、夢を目指すなら、あきらめるより先にもう一歩走る人になる。

気がつけば、パパもハルトも座っていられなくなっていた。チャンスが来るたび、二人で立ち、声をかぎりに応援する。のどが少しかかれてもかまわない。こんなふうには全身で願う時間は、きっと一生忘れない。ハルトは自分の夢と、パパが話してくれた昔の夢が、同じ風に乗ってピッチへ飛んでいくように感じた。





# 夢のゴール

## ## 夢のゴール

---

試合の終わりが近づいたころ、会場の空気はぴんと張った糸みたいになっていた。時計が進むたびに、応援の声は大きく、切実になる。そんな中で一人の選手が中盤から前へ走り出し、味方のパスを受けて左足をふりぬいた。ボールは夜の光を切るように曲がり、ゴールのすみへ吸いこまれていった。

ほんの一秒の出来事なのに、ハルトにはゆっくり見えた。キーパーの手が届かないこと、ネットがふるえること、次の瞬間に世界がひっくり返るほどの歓声になることまで、全部がはっきりわかった。遅れてどおんと音の波が押し寄せ、スタジアムは喜びでゆれる大きな船みたいになった。

ハルトは気づくより早くパパに飛びついていった。パパも同じようにハルトを抱きしめ、二人で笑って、叫んで、もう何を言っているのか分からないくらいだった。知らない人たちとも手をたたき合い、周り中が友だちになったみたいだった。その中心で、ハルトの胸はあふれるほど熱くなっていた。

『いつか、ぼくもあんなゴールを決めたい』ハルトが耳元で言うと、パパは涙の光る目でうなずいた。『決められるよ。大事なのは、今日みたいに心を動かされたことを忘れないことだ』その言葉を聞いて、ハルトははっきりわかった。大きなスタジアムのヒーローもすごい。でも自分をここまで連れてきてくれた人も、同じくらいすごいのだ。





# 帰り道の約束

## ## 帰り道の約束

やがて試合終了の笛が鳴り、人々は満足そうな顔で席を立ちはじめた。外へ向かう通路はまた大混雑だったが、行きとは違って、みんなの足どりはどこかやわらかい。すばらしい時間を胸にしまって帰る人の流れだった。ハルトもマフラーをぎゅっとにぎりしめながら、何度も振り返っては明るいピッチを見つめた。

夜の東京は、行きより少し静かに見えた。駅までの道で見上げる空は黒く、スタジアムの光だけがまだ夢の続きのように浮かんでいる。帰りの電車では、ハルトは座席に座るとほっとしたが、目はぜんぜん眠くならない。窓にうつる自分の顔が、朝より少しだけ大人びて見える気がした。

『パパ、今日はほんとうにありがとう』ハルトがまっすぐ言うと、パパは照れくさそうに笑った。『こちらこそ、一緒に見られてよかったよ』少し間をおいて、ハルトは続ける。『ぼく、練習でうまくいかない日があっても、すぐあきらめない。パパ、これからもいっしょにやってくれる？』パパは大ききうなずいた。

『もちろん。夢は一日でゴールに入らないけど、一日ごとに近づけるからな』パパのその言葉は、電車の揺れの中でもしっかり耳に残った。ハルトはポケットの中の半券にそっとふれ、なくさないように指で押さえる。今日の思い出は終わりではなく、明日からのスタートなのだと、夜の窓が静かに教えてくれた。





# 夢のつづき

## ## 夢のつづき

---

家に着くと、ママがまだ起きて待っていてくれた。ハルトは靴をぬぐより先に、『聞いて、すごかったんだよ！』と話しはじめる。ピッチの色、ゴールの音、人の波、パパが教えてくれたこと。言葉が足りなくて手までぶんぶん動いたけれど、ママは何度もうなずきながら笑い、最後に『二人とも、いい顔をしてる』と言った。

その夜、ハルトはベッドのそばにチケットの半券を置いて眠った。朝になると、昨日の歓声はまだ胸のどこかで鳴っている。パパが『少しだけ公園でけるか』と声をかけると、ハルトはすぐにボールを抱えた。芝のにおいもライトもない小さな場所だったが、ハルトには昨日のスタジアムと一本の線につながって見えた。

パパと向かい合ってパスをしながら、ハルトは何度も思った。ぼくがずっと追いかけてきたヒーローはテレビの中にもいる。でも、いちばん近くで背中を押してくれるヒーローは、いつだってとなりになっていたのだ。パパのやさしい声、まっすぐな言葉、大きな手。その全部が、ハルトの夢を前へ運ぶ風になっていた。

ボールは朝の光の中をころがり、ハルトは少しだけ強く、少しだけ正確にけれるようになっていた。昨日見た夢のゴールはまだ遠い。でも、遠いからこそ走りたくなる。ハルトは笑ってボールを追い、パパも笑って追いかける。東京の空の下で、父と息子の新しい試合は、もう静かに始まっていた。







🇳🇴のPlyxが❤️を込めて制作

---



デジタル版およびオーディオ版をスキャンしてください